

次に香川県の代表的な地震・津波に関する防災風土資源の事例を3つ選び、以下に述べる。

## エ) 香川県の代表的な地震・津波に関する防災風土資源の事例

### ① 田潮神社の由来碑（丸亀市）（表4の番号90）

香川県丸亀市土器町の田潮神社（写真1）の名前の由来にまつわる言い伝えが、南海地震津波に関連しているのではという話がある。現在の海岸から2km程度入ったところにある田潮神社の石碑（写真2）にその由来が刻まれている。

石碑刻字：南北朝時代、貞治元（1362）年7月、細川頼之が將軍足利義詮（よしあきら）の命により、細川清氏を攻めた時、・・・（中略）・・・全讃史には、はじめ源少将が攻めてきたとき、頼之は、しばらく当社付近へ退却したが、社前の水田地帯一面に潮が満ち、敵軍を防いだので、田潮神社と称されたと伝えている。

この潮が満ちたというのが正平の南海地震津波（図1）であった可能性がある。図2の土器川右岸氾濫の浸水図からも、確かに田潮神社前は現在でも低地となっていることがわかる。

以上のように田潮神社（丸亀市）由来にまつわる言い伝えがある。南海トラフの地震の中でも宝永地震と同じ程度大きかったと言われる正平の南海地震津波であった可能性があり、これらも防災風土資源といえる。

#### 《得られる知恵・教訓》

神社の名前の由来が刻まれた石碑の言い伝えから、歴史地震（正平南海地震）で、瀬戸内海のこの付近まで津波が来襲した可能性があることを教えている。



写真1 田潮神社



写真2 田潮神社の由来碑

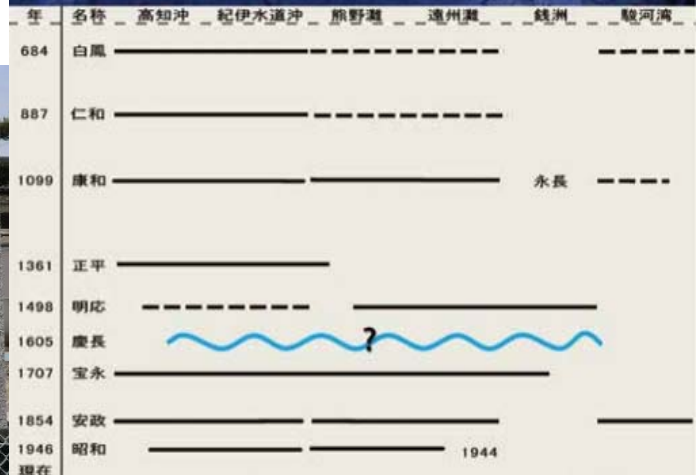
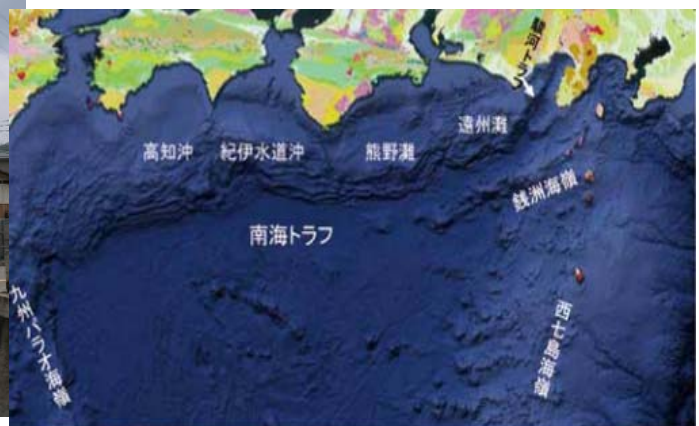


図1 南海トラフの地形・地質と巨大地震の履歴  
（出典：内閣府、報告書1707宝永地震）



図2 田潮神社周辺の土器川氾濫水深図  
(国土交通省香川河川国土事務所提供図に一部上書)

## ② 宝永地震の高松藩の被害（高松市）（表4の番号92）

宝永地震は宝永四（1707）年10月4日未刻（午後2時頃）発生したM8.6の我が国最大級の巨大地震とされ、津波などで全国で死者は推定二万人とも言われている。高松でも大きな被害があったことが史料から分かっている。

芳澤直起氏の研究「宝永地震における高松藩の被害状況」によると、「翁嫗夜話」、「消暑漫筆」、「英公外記」「随観録」などの各種史料から、山崩れ（五剣山の崩壊時の様子）、液状化（地面が裂け、水が地面から湧いている様子）、地割れ（「地裂テ」「土地われる」）の被害の程度、津波高、津浪被害の様子、高松城下町の被害の具体的な場所やその被害の程度などが詳しく述べられている。

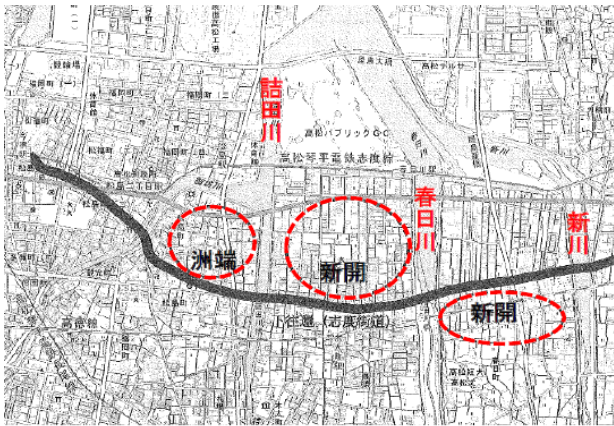
その中で、宝永地震における、高松城下町の建物や人に与えた被害（高松藩から幕府に報告へ提出した「随観録」）を示し、「地震により高松城が天守櫓の屋根瓦が落ち壁が傷つくなど大きな被害を受けていたこと、高松藩における倒壊家屋の被害が最も多かった場所が、城内の町人たちが居住していた場所であり、高松藩全体の倒壊家屋の約七割を占めている。」としている。

また津波の被害については、「翁嫗夜話」の「来日夜小震数矣潮汐高恒五六尺堤防多潰」や「消暑漫筆」の「高潮来り平地之上深事六尺」の記述から、高さが180cm程度の津波により港の堤防の多くを破壊する被害を出しているとしている。

さらに藩政時代の松島・木太付近干拓地推定図（図1）を示し、西嶋八兵衛や高松藩初代藩主の松平頼重の干拓事業で造られた防潮堤上に志度街道を通したため、軟弱な地盤が宝永地震の激しい振動の為、地割れや液状化被害が発生したのである。」としている。その干拓地推定図に登場する松島・木太付近の現在の状況を写真1に示す。

昭和9年から昭和13年の観光道路の改良工事時の様子をまとめた「高松今昔物語」によると、昭和9年当時の地形図（図2）や当時の写真2に示すように、その周辺が藩政時代の志度街道の面影が残るような道路や農村低地であることがわかる。また戦後、米軍が撮影した高松市の航空写真（写真3）からも、高松城周辺に塩田や水田があり、昔、海であった軟弱地盤の上に発展した街であることがよくわかる。

現在は多くのビルや住宅が建ち元々の地形がわかりにくくなっているが、自分が住んでいる本当の地形を知ることが防災には必要である。



※ 〇で囲っている場所が「翁姫夜話」「英公外記」に記載されている松島・木太付近の干拓推定地

図1 藩政時代の松島・木太付近干拓地推定図

(出展：香川県文書館起要第18号 p54 松島・木太付近干拓地推定図に加筆)



写真1 元干拓地、松島・木太付近の現在の様子

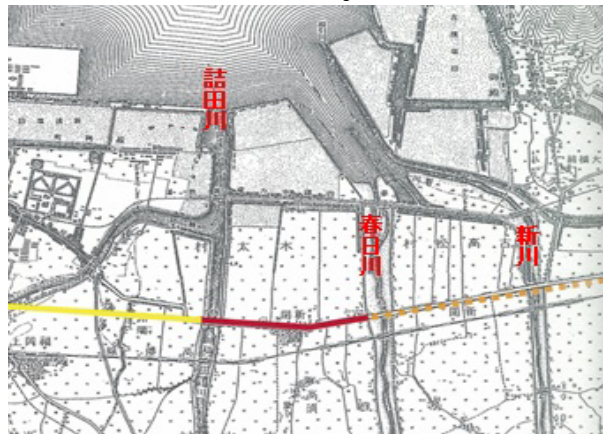


図2 昭和9年当時の地形図と改良工事区間



写真2 昭和初期、改良前の詰田川橋と周辺の様子  
(詰田川右岸から南西方向望み、右前方に見える山は栗林公園の裏山)



写真3 戦後、米軍が撮影した高松市の航空写真

《得られた教訓》

過去の災害の史料や写真などの情報から、「先祖帰り」の視点で身近な地域の自分が住んでいる土地の地形や地質などを知り、防災を再考することである。

③ 五剣山の山容（高松市）（表 4 の番号 93）

今から 301 年前の 10 月 28 日に M8.6 という宝永地震が発生し、有名な「五剣山」図 1 の東の峯が崩れて、私たちが現在、見慣れている写真 1 のような「四剣山」になった。



図 1 宝永地震以前の五剣山の山容  
(四国霊場記集より、一部加筆)



写真 1 現在の五剣山の山容  
(2008 年撮影に上書)

四国霊場第八十五番札所・八栗寺の背面にそびえるこの山は、もともと五つの峯があることから「五剣山」と名付けられた。当時、「五剣山」の一峰崩落の様子を牟礼町史「蘭窓茶話」は、「十月四日（10月28日）は甚だ暖にして単衣を着る。笠を着て綿をとり苗をかる。八つ時分（午後2時）に地震してその声雷の如く、地裂けて水湧き出る。砂地は裂ける事わけて甚だし。五剣山の一峰崩れて落ちたり。火光雷の如く、其の響遠方まで聞えたり。」と大震動で崩落したと伝えている。

この歴史的事実から得られる教訓は「今度、私たちが遭遇するであろう南海地震で香川県内でも大きな被害を受ける危険性がある」ことを教えてくれていることである。天災は忘れた頃にやってくると言われているが、実際は私たちが住んでいる危険な大地の宿命を忘れ、災害の痛みを忘れ、自分たちに適した備えを怠るから、災害を呼ぶ込むのであると思う。

また、土佐国の宝永地震の記録、谷陵記（コクリョウキ）図 2 には、「大地震起こり、山穿て、水を漲らし川埋まりて丘となる」とあり、多くの皆さんがテレビで見た平成 16 年新潟県中越地震において山肌が崩れ川が埋まって「天然ダム」ができ、その上流に水が溜まった現象である。そのような現象が発生していたと記述している。

発生箇所が具体的なものは少ないが、「宝永地震記」によると、高知県旧佐川領内（現越知町）の「横倉別府山二の宮山頭（写真 2）東の方へ崩れたることより麓まで四五十丁(4.5~5.5km)程崩れ落ちる。」とあり、また前述した舞ヶ鼻崩れの仁淀川越知町の天然ダムや高知県室戸市の佐喜川上流で加奈木崩れ（図 3）が発生した。このように四国では、山崩れによる土砂災害も多数発生していた。

谷陵記  
寶永四年十月四日未上刻大地震起  
山穿て水漲し川埋りて丘となる  
氏屋を穿て倒れ入るは  
頓絶者多し又山崩れ  
死傷多し若し予り係  
之得しトツアツク所  
邊ノ左家一戸ノ後方  
未下刻より



図 2 谷陵記に傍線加筆  
図 3 宝永地震による土砂災害地点  
(出典：四国山地の土砂災害の図に一部上書き)



写真 2 横倉山の山容（越知町）

今後、私たちが遭遇するであろう南海地震が発生すれば、山間部や地すべり地帯の多い四国では、土砂崩れで川が塞ぎ止められ天然ダムができ、大雨で天然ダムが崩壊するなどの土砂災害が、水害に進行する「泣き面に蜂」の複合災害の発生も懸念される。

このような四国各地で発生した歴史地震動の被害教訓を忘れないためにも「五剣山」は、四国の皆さんに、香川県の地震動の大きさを表す南海地震警鐘のランドマークとして、広く伝えたいものである。そのような観点からも現在の五剣山の山容は、貴重な防災風土資源といえる。

《得られる知恵・教訓》

得られる教訓：現在の五剣山の山容は、南海地震動の警鐘ランドマークとして、香川県でも南海地震で大被害を受ける危険性があることを教えてくれている。

以上、34箇所地震・津波に関する代表的な防災風土資源について記述してきたが、四国に住む私たちが今後、遭遇するであろう南海地震の発生確率も時計の針が進むごとに高まっており、文部科学省の地震調査委員会の評価では、今後30年間で発生する南海地震の発生確率は70%程度となっている。

ちなみに私たちが今後30年間、火災で罹災する確率が1.9%、交通事故に遭い負傷する確率が24%、と比べると南海地震は、いつ起こってもおかしくない高い確率である。しかし多くの方は、地震はまだ起こらない、起こっても「自分は大丈夫」という心理を持っていて、自分は被害に遭わないと思っている人が多い。自分が被害を受けたら、家族や周りの人も大変になるということを考えていただき、自分が死なないようにすることが最も大事である。

自分が助かることが防災の最初で、自分も含めて、複数の人が助かって初めて、ご近所の人を助けることができる。そのために一人一人が、紹介した地震・津波に関する四国の防災風土資源の知恵・教訓から、その多くの対処方法を知り、考え、行動することが必要である。

## 2.3 四国の土砂災害に関する防災風土資源

### 1) 調査対象

四国に残る土砂災害に関する防災風土資源として、四国地盤88話で紹介されている徳島県の板野町の地すべりでできたジョウガマル池から、香川県の讃岐山脈のケスタ地形と地すべり地形石碑まで、先に示した図1の茶色のポイントで示す24箇所を調査した。

### 2) 調査結果概要

調査結果は、表5の名称に示すとおりである。

徳島県には、有名な茶園嶽の大崩壊や高磯山の大崩壊があるが、今日の大規模地滑り先例と考えられる。右回りで香川県の讃岐山脈のケスタ地形と地すべり地形までを四国の土砂災害に関する防災風土資源を最後の24とした。

以下に、四国の土砂災害に関する防災風土資源調査結果を示す。